老衰と意識　賀状からの波動

ＡＩという単語が盛んだ。従来のパソコンなどの端末での「検索する」が「ＡＩに訊く」に置き替わってきた。報道番組でも「・・ＡＩ音声により伝えます・・・」などの表現が頻繁に聴かれるようになった。

ＩＴの大手各社がそれぞれ独自の無償ＡＩアプリを公表し一般の利用に提供している。

このＡＩの技術的な仕組みには精通していないが、おおむね、検索する事項に関するこれまでの記録等の膨大な集積及び日本語への翻訳と理解している。

話は急変するが、私もそろそろ老衰という言葉が身につまされてきた。

文字からは「老齢化」と「衰弱」。加齢に伴う病気や怪我を原因としない心身の機能、意識レベルの低下あるいはそれらによる生命の終焉らしい。

私の場合、幸いまだ生命の終焉にまでは間があり そうだ。

少なくなる傾向だが今はちょうど年賀状往復の時期でもあるので、これにかかわる経験だが、先般、以後のこともあるので、断捨離なる合理意識の実行を思い立ち、書籍や不要印刷物の処分を実施していた。その作業中に３、４年前に受けた年賀状１枚が目に止まり、廃棄物箱に投入寸前に一瞬発信人を注視したところ、４年前に急逝して今はいない知人の丁寧な手作りのもので、「元気です。健康には充分お気をつけて」と家族それぞれ自筆の筆跡が書かれていた。

手に持ったまま、合理意識は即消し飛び、当人の生前の笑顔や身の動作、ご家族に関連する生前の様々なことが連鎖的に思い出され、かなり長時間それらの世界に入り込み茫然自失。以後は断捨離作業の理想はどこへやらとなってしまったのであった。

最近は、これに類するような記憶の連鎖や単純な語句の語源探求が多くなってきた傾向にある。私は、これらも老衰の一つの特徴ではないかと考えざるを得ない。だとするとＡＩ君の言う加齢による意識レベルの低下という次のような単純な現象記述では足りないような気もする。

○　食事量の減少
○　意識機能の低下
○　臓器機能の低下
○　食欲の減退
○　睡眠時間の増加
○　意識の混濁
○　体重の減少
○　呼吸の変化

あえて近いのを選べば「意識の混濁」に入ろうか。

以前に、出所は不明だが、「人間は死の間際に一生の出来事が走馬灯のごとくに早送りで脳裏をかけめぐるものだ」という表現を聴いたことがある。もちろん、逝った人があとでそんな体験を言い残せることはあり得ないが。重たいセリフかも知れない。

人間の「意識」についての世界は、デジタル的理屈やＵＳＢチップでは踏み込めない世界ではないだろうか。

（Ａ・Ｎ）

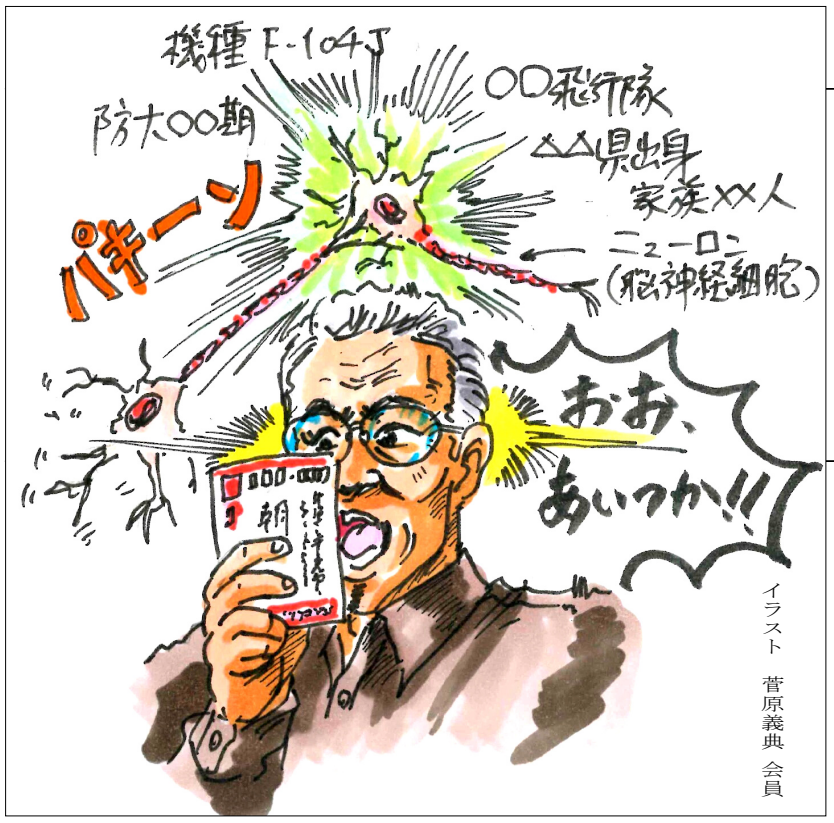


イラスト　菅原義典 会員

文部省唱歌『スキー』の『山は白銀(しろがね)』は利尻富士

『風をつんざき』という歌詞に出会ったとき、風に立ち向かう静かな勇気が体の奥から湧き上がり、「風を劈き」と「風をつんざき」の表記の違いの意味も分からない少年時代の記憶が蘇った。

まだスキー場らしきものも存在しなかった頃。雪に覆われた炭坑住宅街の裏手にある禿山へ、吹雪の日以外は仲間たちとスキーを履いて、ときには担ぎながら登った。１時間余りの時間をかけて、北斜面の頂へと向かう。そこは斜面というより、傾斜は35度に迫る崖、俗に言う“壁”であった。

西日を受けたその壁が、鈍色（にびいろ）にギッラと光って、静寂の中に鋭い存在感が浮かび上がり、飛び出す寸前、鼓動が体の外で鳴り響いて、口の中が乾き、なぜか後悔の念に襲われる。

だが仲間の前では尻込みできず、痩せ我慢の度胸一発。無茶と紙一重の勢いで、我先に雪面を蹴り、壁へ突っ込む、これぞ醍醐味だ。

見栄は、臆病風を勇気の風に変えて、背中を押す。「飛び出してしまえば、こっちのものだ！」。

恐怖が快感へと変わり、斜面を滑りながら口ずさむ・・・

「風をつんざき、左へ右へ、飛べば踊れば流れる斜面」。

その瞬間だけは、風と自分が一体になったような気がした。まさに、「ぐんと迫るは、麓か谷か」。命を預けるほどではないが、ほんの少し恐怖を乗り越えた喜びが確かにあった。そして、自分自身と仲間たちを、誇らしく思った。

少しだけ大人になった気分で、こんな会話も交わした。

「なあ、“劈く”って何だよ？」

「スゲェー速さで風を切ることだろうよ！」

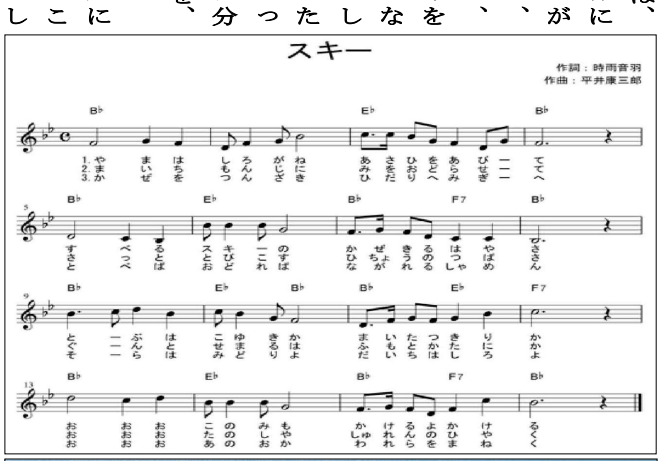
「空は青だろ、なぜ“みどり”なんだよ？」そんな問いと冗談のあいだに、くだらないようで深い対話が宿っていた。

あの頃の午後は鈍色（にびいろ）の輝きで、凍える寒さから心を温めたのは、雪の上で仲間と一緒に過ごす一時で、夕日が白銀を染める頃、「また明日！」と言葉を交わし、カラスと一緒に家路につく。

恰もトニー・ザイラーか猪谷千春になった気分のスキー小僧達の真冬の午後は、夢を胸いっぱいに膨らませながら暮れて行った。

当時はコルティーナ・ダンペッツォ冬季オリンピックの影響もあって『白銀は招くよ！』が流行りだったが、私たちスキー小僧の愛唱歌は、何といっても「山は白銀・・・」の『スキー』だった。

「飛蝶の翼」「空はみどり」「手練の飛躍」など、子どもには難解な言葉に心惹かれ、「誰がこんな詩を書いたのだろう」と想像した。



作詞者が利尻島出身であり、故・フランク永井氏の『君恋し』も手がけた時雨音羽氏だとは、当時は知る由もなかった。

私は、空中撮影の背景に利尻島を幾度となく選んできた。その理由は、天塩海岸から望む利尻富士が、日本海に堂々と佇み、比類なき美しさを放っているからである。映画『南極物語』や『北のカナリアたち』でも、その姿は、力強く、厳しく、そして優しく描かれていた。

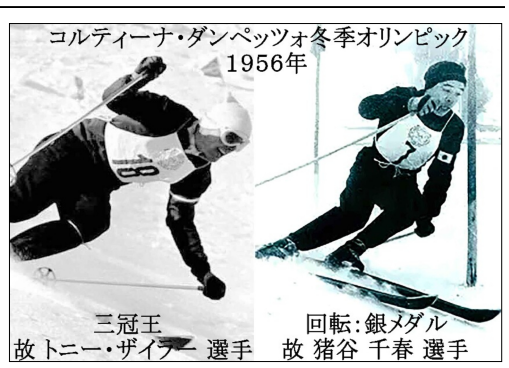
１９８７年、故・江藤兵部空将の編隊飛行を撮影した際、空から見た利尻富士の威容に圧倒され、シャッター・チャンスを逃した。

「もう一度、周ってください」とお願いすると、ヘルメットのレシーバーに「見惚れていたな？」という優しい声が流れ、もう一度周回していただいた。あの瞬間、風景と人への敬意が、シャッターを押す指先に集まっていた。

登山家・故深田久弥氏が『日本百名山』に選んだ利尻富士は、標高１７２１ｍながら、海抜０ｍトル近くから登る厳しい山である。冬には季節風に晒され、その姿は、まるで孤高の美を湛えているかのようだ。

そんな自然の中で育った人だからこそ、言の葉には魂が宿り、飛蝶のように翼を拡げ、夢の世界を自在に舞いながら、読む者の心をそっと包み込むのだ。

まさに、推理小説家の故・松本清張氏が語ったように、「空想の翼で駆け、現実の山野を往かん」である。西日を受けた雪の鈍色の煌めきも、山の気高い姿も、そっくりそのまま昨日につづく今日であれと、静かに願う。


コルティーナ・ダンペッツォ冬季オリンピック
1956年
三冠王
故 トニー・ザイラー 選手
回転:銀メダル
故 猪谷 千春 選手

利尻富士を背景に飛行する 故・江藤兵部空将編隊